

スイートトラップ

M a r i n o & R i k u

水城夕

Yu Mizuki

termity



エタニティ文庫

目次

100
%
の
恋

50
%
の
恋

139

5

50
%
の
恋

ふたつの影が伸びる。

「深い青をまといはじめた空に浮かぶ三日月を、真梨乃まりのは意味もなく視界の端はしで眺めていた。

視線を下げると、体育館らしき建物のわきの水道に少年がいる。

横顔からは、なにを思っているのかはわからない。彼はタオルで顔を雑めづに拭くと、ようやく真梨乃の視線に気づく。

夕日に照らされた彼の顔は端整たんせいで、真梨乃は思わず見惚みとれていた。

彼が顔を上げると、少しだけ色素の薄い髪が額と頬にこぼれる。そこから落ちる水滴が、徐々に頼りなくなる西日に反射した。彼が目を伏ふせるので、真梨乃はなにかを言いながらかけ寄る。

けれども音が耳に届かない。

風景や色彩、頬をなでる風の感触まであるのに、その世界には音だけがなかった。

真梨乃が声をかけると、少年は頷うなずいて目を合わせることもなく視線を落とす。

彼の背はまだ真梨乃と同じくらいか、少し高いかだろう。ふたたび真梨乃がなにかを伝えると、彼はようやくよく柔らかな微笑をたたえる。その顔が、たとえようもないほどに、きれいだと感じた。

臉まぶたの向こうが仄ほかに明るい。

「真梨乃、いい加減起きろ。遅刻するぞ」

目覚ましの代わりに弟の声で目を覚ます。

伸びをしながら、弟が手渡してくれたミネラルウォーターを口にする。

社会人四年目となった中森真梨乃は今年、ようやく親元を離れマンションで暮らしはじめた。

実家を出るにあたって両親が出した条件は『弟と同居すること』だった。ひとり暮らしができないことに多少の不満を感じたが、面倒見のいい弟とふたりきりの生活は悪くはない。

昔からどちらが上の子だかわからない、と言われて育ってきた。真梨乃が頼りないのか、弟がしっかりしているのか、あるいは両方か。

「おはようー」

たまには自分で起きろよ。

そんな言葉を感じていた真梨乃だったが、弟の創は呆れたように笑うだけで、ソファにのっていたカバンを手にとると肩にかけた。

「じゃあ俺は大学行つてくるから、きちんと戸締まりして出かけるよ」

言いながら彼は、壁にかかった鏡を見ると、軽く馴染ませたワックスで毛先をいじる。最近の若者らしく、明るく染めた長めの髪型をしている。

「行つてらっしゃーい」

真梨乃が寝ぼけたまま手をふるると、創はなにかを言いたそうに苦笑を漏らしたが、時間が押しているのか、急いで部屋を出て行つた。

創が出かけてしまった今、二度寝をしたら起こしてくれる人はいない。

真梨乃はベッドから立ち上がり、伸びをすると洗面所で顔を洗う。

トーストを焼きながら冷蔵庫からヨーグルトをとり出し、簡単な朝食を終えるとメイクにとりかかった。特別美人というわけではないがハッキリとした顔立ちをしているので、ポイントメイクは最小限に抑える。二十五歳という実年齢よりは、少しだけ幼く見られる童顔で、髪は華やかさを出すため毎朝軽くカールさせている。通勤用の私服は標準サイズだ。学生の頃はダイエツトなどしなくても痩せていたのに、ここ数年は太くも細くもない体型に落ち着いている。

着替えて髪に仕上げのスプレーをかけると、真梨乃は眠気をこらえて部屋を出た。

「あ、真梨乃さん」

「健二、おはよう」

真梨乃が部屋の扉を開けたところで、隣の部屋に住んでいる健二と鉢合わせた。彼は真梨乃の中学時代の後輩で、社会人になった今でも交流のある友人のひとりだ。

恋愛相談から仕事のグチまで幅広く聞いてくれる健二は、真梨乃にとって創と並ぶくらいに大切な存在だった。ふたりとも年下というところが引つかかるが、年上の威厳など気にしたら負けと自身に言い聞かせている。

「次の休みヒマですか？」

脈絡のない言葉に驚くが、彼はこうして真梨乃を遊びに誘うことが時々ある。

「ずいぶん急だね」

真梨乃は少し考えてから、彼を見上げた。

「彼との約束が入らなかつたら、多分ヒマだよ」

最近ほ恋人ともゆつくり会っていない。今週のスケジュールはどうなっていたかな？なんて考えながら、真梨乃は健二と肩を並べてマンションを出る。しばらく歩くと駅が見えてきた。

「じゃあ、行つてきます」

「気をつけてねー」

健二は電車通勤だ。つくづく会社から徒歩圏内のマンションを選んでよかった、と考
えながら真梨乃も出勤した。ひとりになって歩いてみると、不意に今朝のことを思い出
した。

なんだか懐かしい夢を見ていたような気がする。実際にあつたことなのか定かでない
が、なんとなく気分がよかった。

今日はいいことが起きそうな気がする。

だが真梨乃のその思いは、あつという間に打ち砕かれることになった。

「ごめん、別れよう」

「はい？」

目が点、青天の霹靂、など色々な言葉が頭をよぎった。

目の前には付き合って一年になる恋人がいる。仕事をはじめまる前に休憩室のあるフロ
アに足を運んだら運良く彼がいたので、真梨乃は嬉々として声をかけた。しかし、突然
別れの言葉を突きつけられたのだ。

突然の展開に、咄然とする真梨乃を尻目に、彼は一仕事終えたかのような涼しい顔を
して脇を通りすぎる。

ふり返って彼の行き先を目で追っていると、傍らにはかわいらしい女子社員がいて、
馴れ馴れしく彼の腕をとっていた。呆然としている真梨乃に、女子社員は挑発的に微笑
むと、彼とともに立ち去っていった。

「はあ……」

数週間ほど前から、恋人が浮気をしているという噂を耳にしていたが、真梨乃は噂話
を聞き流していたのだ。誠実な人柄が、自分に合っているだろうと思っていた。

飾らない真梨乃が好きだと言ってくれていたのに、結局、男の人はみんなかわい女
の子を選ぶのだ。

悲しくなる。

嘆息してうつむいていると、若い女の子たちの笑い声が真梨乃の耳に届いた。何気な
く目を向けてみると、おしゃべりしながら廊下を歩いていた。

楽しそうな様子に、今の自分ますますみじめに感じられる。またもやため息が出そ
うになったそのとき、誰かの視線を感じた。

顔を上げると、思わず見惚れてしまうほどきれいな顔をした、若い男性と目が合った。
目が合う？ 気のせいだろう。偶然、視線が重なっただけだ。

そう思って目をそらそうとしても、彼の視線が真梨乃から移動することはない。
あきらかに、見られている。

いつから？

先ほどまでは背を向けている形だったため、気づかなかった。もしかしたら真梨乃が恋人にふられる一部始終も、見られていたのかもしれない。

周りに人がいることなど気にする余裕もなかった。

どうしよう、見られていた？

目の前で失恋した真梨乃を哀れだと思い、視線が離せないのだろうか。いたたまれない。

真梨乃がその場から動こうとした瞬間、彼は笑った。

最初は気のせいだと思った。けれど意識して目を向けてみると、彼はたしかに真梨乃に視点を定めたまま、きれいな口元に冷笑を浮かべたのだ。

真梨乃を見ながら目を細め、唇の端だけをすり上げた表情は、冷たいと表現するよりほかない。

挑発的な表情に、背筋をゾクゾクとしたものが這い上がる。

笑われた？ ふられたシーンの一部始終を見られた上に、笑われた？

真梨乃が啞然として固まっていると、嫌味な美形男は目を伏せて、ようやく視線をそらすと廊下側へと向き直った。

横顔までが完璧に美しい。嫌味な男に見惚れている場合ではないのに、くやしいのに、

怒ってもいいような場面なのに。

真梨乃は結局その場から一步も動けず、彼が立ち去るのを見届けることしかできなかった。

「笑われた……笑われたよ」

真梨乃は拳を握りしめると、机を軽く叩いた。鈍い音とともに、机の上においていたコーヒーの水面が小さな波紋を描いた。

恐らく、自分よりもいくつか年下であろう男に、失恋シーンを見られた上に笑われた。見て見ぬふりをするか、せめて慰めの言葉をかけるかにしてくればいいものを。失恋最後の女を見て笑うなんて、信じられない。くやしさが込み上げる。

「最近の子は、一体どうなってるの？」

ぶつぶつと独り言を漏らしてしまっから、年寄りくさい言葉を吐いてしまったと気づいた。

無意味に同じ箇所キーボードを叩く。苛立って、まともに仕事もできない。

無駄に顔のいい、あの手の男は、どうせ失恋の経験などないのだろう。

真梨乃みたいな普通レベルの女がふられたのを見て、つい笑いたくなくなったのかもしれないが、そこは大人ならば抑えるべきだ。直接説教をしてやりたい気分だった。なぜあ

のとき彼を呼びとめて、一言叱しかってやらなかったのだろう。ひどい侮辱おじよを受けた気分だ。そこまで考えて、次にまた同じ場面に遭遇したところで、自分はきつとなにも言えないだろう、とも思った。

苛いら立ちながらも今とりかかっていた仕事を一段落させると、忘れずに保存する。

「ちよつと休憩」

隣の席に座る同僚に一言残して、フロアを出た。静かな廊下の一角にある休憩所で立ちどまると、自販機に小銭を入れる。いつものペットボトルにランプが灯ったのを確認してからボタンを押すと、すぐに下の方で鈍い音が聞こえた。ミネラルウォーターをとり出してキャップを外し、透明な液体を喉のどに流し込む。

深いため息が漏れた。先ほどまでは生意気で嫌味な男への怒りでいっぱいになっていたが、落ち着いた途端とくだんに失恋した事実を思い出した。

そうだ、真梨乃は恋人にふられたのだ。

「なんだかなあ」

失恋しちゃったよ、と考えながらも真梨乃の心は大して痛んでいなかった。

いつからだろう。恋というものに執心しなくなったのは。

特別淡泊とくべつたんぱくというわけでもないが、社会人になってからは一定の作業のように恋人を作っていたような気がする。大好きな人じゃなければ付き合いたくない、なんて考えて

いた学生時代が遠い昔のことに感じられる。今はとりあえず寂しいからこの人でいいか、という感覚だ。

相手もきつと、同じような気持ちだったのだろう。だから簡単に捨てられる。

恋って、どんな感情だった？

好きな人に、好かれない。

そんな当たり前前まへのことが、なかなか難しい。本当に大好きな人に好かれて付き合える人は、世界に何人くらいいるのだろう。

すぐに仕事に戻る気力もなく、真梨乃は廊下の窓から見える外の風景をぼーっと眺めた。

自分はどんな恋がしたいのだろう。しようと思ってしまうものではないのだろうかけれど、ひとつの恋が無残にも終わった今、そんなことばかり考えてしまう。

思えば本気で好きになった人と付き合った経験は、ない。真梨乃が特別不幸だというわけではないのだろう。周りの、多くの人もそんなものだと言う。イベントを過ごす相手あひだりを確保するため、寂しさを埋めるため、告白されたからなんとなく、流れやノリで。世間に転がっている恋なんて、大半がつまらないものだ。

失恋したことをようやく冷静に受けとめる余裕が出てきたところで、ふと嫌味な冷笑男の顔が脳裏にちらつく。やけに忌々いまいましいしかった。

定時ぴったりに仕事を終えて帰る準備をしていると、同僚の早川早希子はやかわさきこが声をかけてきた。

「真梨乃、今日これからどうする？ ヒマなら夕食一緒に行かない？」

「あ、えっと、」

今日はどうだっただろう？ と考えてから、真梨乃は軽く息をつく。

そうだ、もうスケジュールを気にする必要はなくなったのだ。

「ヒマだよ。どうせなら飲みたいな！」

ふられたことと笑われたことで、久しぶりに思い切り飲みたい気分だった。

真梨乃の言葉に、早希子は笑顔で頷く。

「じゃあ居酒屋へ行こうか」

早希子の提案で、ふたりは会社から少し離れたところにある洋風居酒屋へと向かった。

これが運のつきだったのだろうか。何気ない日常に、思わぬ落とし穴が潜んでいるなんて思うはずもない。とくに真梨乃のような、平和慣れた生活を送っていた人間にとっては。

早希子と一緒に入った居酒屋では、思っていた以上に酒が進んだ。

乾杯。

合わせたジョッキの音がふたりの上で軽く鳴る。真梨乃はすぐに口をつけると、ビールを半分まで一気に飲み干した。

息つきと同時に、ため息が漏れる。

「豪快な飲みっぷりだねー」

呆れたような顔をしながらも、ノリのいい早希子は楽しそうな口調だった。

「すぐ飲みたい気分だったの」

「そういえば真梨乃、今日は会社にいるときからずっと変だったよね」

変、と面と向かって言うのはどうかと思うが、早希子とは妙な探り合いをする必要もない間柄なので、気にしない。

「ふられちゃったんだよ」

自然と言葉が口からこぼれた。

早希子は一瞬目を丸くしたが、大方を察してくれたのか頷くと、残っていたビールの三分の一を飲み干す。

「そっかあ。でもそんなに傷ついてはなさそうだよね。真梨乃はそんなにあの人に惚れていたという感じでもなかったし」

早希子に言われて、真梨乃はなるほど、と思う。たしかに失恋した割には、大して傷ついていないかもしれない。一方で、これが早希子なりの慰めかたなのだろう、とも感じていた。

「傷ついてなさそう」と言われれば自分でもそう感じ、逆に「傷ついてるね」と言われれば傷ついているような気がする、人の気持ちってそんなものだろう。彼女もわかっているのかもしれない。

「しかもさ、ふられたところを変な男に見られてて笑われたんだよ」

「へえ？」

真梨乃は乱暴にジョッキをテーブルにおいた。

「どう見ても後輩、年下だったから余計にムカつく！」

「それは災難だったね」

「そうなんだよ。聞いてよ」

基本的に早希子は聞き上手だ。真梨乃が胸に溜^ためていた鬱憤^{うづ}を吐き出すと、彼女も共感して慰めてくれて、ふたりだけの飲み会は盛り上がった。

真梨乃が自分の部屋へ戻ったのは夜も十時を過ぎたあたりだった。

「ちょっと飲みすぎちゃったかな」

酔っていると、無性に独り言を言いたくなる時がある。

創はまだ戻ってきていないようだ。彼がいたらグチをこぼして、慰めてもらおうと思っていただけに落胆する。もう少しだけ飲みたい気分だ。冷蔵庫を開けて缶チューハイの存在を確認すると、先にシャワーを浴びることにした。会社から居酒屋、家へと歩けば冬場でもそれなりに汗をかく。服を脱ぎ捨て、クリームタイプのメイク落としで化粧を落とす。頭から温かいシャワーを浴びると、酔った頭に心地いい。

バスルームから出て、タオルで髪を雑に拭^{ぬぐ}ってから洗い流さないトリートメントを少量つけると、ドライヤーをオンにした。肩を少しこえるくらいの髪は、簡単に乾かせて楽だ。

八割ほど乾かしてから冷蔵庫を開けると、缶チューハイのプルタブを起こした。空気が抜ける音とともに、あたりに桃の香りが漂^たう。

真梨乃は仕事で行き詰まったときや寂しいとき、無性にお酒が飲みたくなる。やはり恋人との別れは、それなりに心に影を落としているようだ。

彼を失ったことではなく、ひとりになったことへの寂しさ、というところが皮肉なものだ。

酔いがまわってくるとハイになり、誰かと話したくて仕方なくなった。創は、今日中には帰ってこないみたいなので、あきらめるしかない。隣に住んでいる健二はいるだろう。

うか。

よろよると立ち上がると、缶チューハイをいくつか手にとりスーパールの袋に入れた。世界がまわる。

頭がぼーっとして、まともな思考を保つことができなかつた。意味もなく笑いたくなる。目もしつかりと開けられないほどふわふわした状態で、よろつきながらも前に進んだ。

玄関にたどり着き、扉を開けると外に出る。真梨乃が廊下に出たところで、ちょうど隣室の扉が開いた。

「あ、健二」

「え？」

出てきた人影に歩み寄る途中で、真梨乃は足がもつれてバランスを崩す。

「わー！」

色気も素っ気もない悲鳴を上げながら倒れかかると、地面と激突するよりも先に彼に支えられる。

「真梨乃さん、なにしてるんですか？」

抱きとめられて、真梨乃はふわりと意識が宙に浮くのを感じていた。気持ちがよくなくて目を閉じる。彼からは、爽やかなシャンプールの香りが漂っている。こんなにもいい香りを、いつも健二はまもっていただろうか。身近にすぎると、気づかないものなの

かもしれない。

酔った頭であれこれ考えていると、彼は真梨乃の腕をとる。見上げることもできなかつたが、視界の端には彼の手がうつっていた。

健二の手って、こんなにきれいだっただけ？ 気づかないものだなあ。

「酔ってますね」

耳元で彼が呆れたように囁く。

健二の声は、こんなに色気があつただろうか。今日は色々な健二を発見している気分だ。

「部屋に連れてってー」

彼は返事をするよりも先に、ひよいと真梨乃の体を抱き上げた。手にもつていた袋が落ちる感覚があつたが、地面に落ちた音はしない。彼は袋もきちんともつてくれたようだ。

真梨乃はすぐに隣の部屋へと連れられた。扉が閉まる音とともに、一瞬視界が真っ暗になったが、すぐに玄関の電気がつけられたのか、向こうがほんのりと明るくなる。

鼻腔をくすぐるのは、爽やかで自然ないい香りだった。芳香剤のような人工的な香りではなく、先ほど彼から漂ったものに似ている。

「んー」

真梨乃が意味もなくなっていると、部屋のソファに乘せられたようだった。こんなソファを、彼はいつ買ったのだろう。

「健二」

名前を呼んでも返事がない。真梨乃がソファからずり落ちて床のクッションに座ると、カサリというビニール袋を置く音とともに、彼もテーブルの近くに腰を下ろす気配があった。

以前来たときとは、部屋の雰囲気も違う。模様替えてもしたのだろうか。

「ねえ、缶チューハイもつてきたから一緒に飲もうよ」

「まだ飲むつもりですか？」

「うんっ」

彼は呆れているようだったが、かまわずブルタブを起こす。喉に甘いチューハイを流し込むと、さらに平衡感覚と判断力を失った。

「もうやめたほうがいいですよ」

「平気平気。私二日酔いとかにはならないタイプだから。知ってるでしょ？」

ふたたび彼は口を嚙む。

「ほら、飲んでよ。私だけ飲んでたら話しづらいじゃない」

真梨乃がすでに開封して自分が口をつけた缶を勧めると、彼もようやく飲みはじめたようだった。

ぼやける視界の中、缶をもつ手がやけにきれいだなあと考えていた。

なにかが、おかしい。でもなにがおかしいのかは、わからない。アルコールが入った状態ではうまく考えがまとまらず、真梨乃はかぶりをふると彼の手をつかんだ。健二と創は、気軽にスキンシップができる数少ない異性だ。

男らしさのない繊細な手と指先。真梨乃の手よりも、ずっときれいだ。

「彼にふられちゃったよ」

まだ彼はなにも言わないので、真梨乃はかまわず続ける。

「二股されてみたい。困っちゃうよね、今さらフリーとか」

「ふーん」

真梨乃は重い瞼を開けると、視線を上げる。視界の端には、薄い笑いがうつったような気がしたが、すぐ酔いに意識を連れさられそうになった。

このままでは健二の部屋で眠ってしまう。健二とは、そういう関係にはならないとわかってから眠ってもいいのだが、部屋に帰るべきだろうか。気心が知れているとはいえ、相手は男だ。

「私、そろそろ」

そろそろ帰ろうかな、と言おうとしたところで唐突に腕をつかまれて、真梨乃は驚きのあまり言葉に詰まった。

「健二、」

体を震わせた瞬間、唇に冷たくて柔らかい感触がかぶさる。今までにない感覚だった。仄かに甘くて心地よい冷たさがあるのに、触れているところから全身が熱をおびる。呆然としてみると、唇はようやく離れた。

ほやけた視界に、少し癖のある長めの黒髪がうつった。真つ黒というわけではなく、少しだけ茶色がかかっている。

あれ？ 健二の髪はもつと短かったような。

目の前にいる彼の髪は、無造作にまとめられている。健二は基本短い髪に適当にワックスを馴染ませる程度だったはずだ。

もう一度、唇を重ねられた。先ほどまで何度も抱いていながら、酔いに任せて無視し続けていた違和感が、ついに拭えないものとなる。

ようやく気づいた。これは健二ではない。

では、誰？

たしかに真梨乃は、自室を出て隣の部屋に入ったはずだった。泥酔していたとはいえ、遠くへ連れてこられたら、いくらなんでも気づくはずだ。

唇が離れる。

「真梨乃さん、もう遅いですよ」

なぜ気づかなかったのだろう。声も健二とは全然違う。こんなにも、聞いていて心地

のいい声ははじめてだ。

もうろうとする意識の中で、ようやく視線を上げて彼の顔を見た。

目が合う。

頬が熱をもった。

目の前には、この上なく顔立ちのいい男がいた。真梨乃よりも少し年下だろうか。

どこかで見たことがある。いや、確実に知った顔だ。

けれども酔いがまわりすぎていて、頭が答えを出してくれない。

「なんで？」

ようやく口を開くと、彼は薄く、冷たく笑った。

その微笑に、背筋が震える。妙に妖しくうつったからかもしれない。

彼の端正な顔が、翳る。

真梨乃は本能的に目を閉じてしまうと、三度目のキスを自然に受け入れていた。

目眩がする。重心を失い倒れそうになるが、すぐ後ろのソファに支えられて、そのま

ま口づけを受けることになった。

顎に指をかけられる感触とともに、舌が絡み合う。唇の端から声が漏れそうになるのを懸命に抑えていると、口づけは徐々に深くなり、真梨乃の酔いも増していく。意識が沈みそうになった。

「ん……」

唇が離れて、吐息が漏れる。頬だけでなく、全身が熱い。

息をついていると、首筋に柔らかな感触が当たった。すぐに口づけられたのだとわかり、体が強張る。

「ちよっと待、」

待ってと言いたいのには、言葉が続かない。

ふわりと彼の髪から漂うシャンプーの香りに包まれているうちに、真梨乃の酔いは激しくなった。

ああ、もうなにも考えられない。

名前も知らない人だけれど、真梨乃の名前も知っていて、グチにも付き合ってくれた。悪い人ではないに違いない。

酔いを言い訳にはしたくないが、今さら逃れることはできそうにもなかった。風呂上がりの部屋着は頼りないもので、簡単にまくり上げられて下着をさらしてしまう。

「いや」

嫌と言いながらも頭の隅では、それなりにかわいらしい部屋着を選んであつてよかった、と考えていた。

胸元に、直に指が触れるのを感じる。どうしよう、と考えているとふたたび唇が重なつて、思考にもやがかかった。

このキスが原因に違いない。

こんなにも気持ちのいいキスを、真梨乃は知らなかった。過去に付き合った男性とも、今日ふられたばかりの恋人とも、したことはない。

目の前にいる名前さえ知らない、どう見ても真梨乃よりも年下と思われる青年に、キスひとつで翻弄されるなんて。

香りも原因かもしれない。

男独特の匂いが苦手で、これまでの恋人とは触れ合うことがあまり好きではなかったのだが、目の前の彼には、そういったものは皆無だ。下手をすれば真梨乃の周りにいる女性よりもいい香りがする。フレグランスなどのわざとらしい香料ではなく、シャンプーのような自然な香りだから心地いい。

感触も、なにもかもが違っていた。

首筋、鎖骨、胸元に口づけられて、真梨乃は声を漏らす。抵抗らしい抵抗さえできずに戸惑うが、酔いがまわった体は言うことを聞かなかった。気がつくといつの間にか床に倒れ込んでいた。柔らかなカーペットの上なので、痛いということはない。

震えていると、下着を外されて肌があらわになった。見ないで、と言うよりも先に触

れられて、片方の頂に口づけられた。

甘い感覚に声が漏れる。恥ずかしいという思いはあるのだが、酔いすぎているせいから拒絶の言葉を紡ぐことさえできない。

「やだ……」

吐息の合間に声を漏らすと、彼が冷たく笑ったような気がした。

またあの顔だ。

どこかで見たことのある、あの顔。心の中で思った瞬間、背筋に寒気が走るが、それに反して体は熱くなる。

酔いがまわっているためか、断片的に意識は途切れ、気づけば真梨乃だけが身につけているもののほとんどを奪われていた。

どうしよう。

抵抗するにも体が動かないし、目もまともに開けられない。動けないのに感覚は芽えているらしく、彼が今自分のどこに触れているのかだけは鮮明にわかった。

胸元に触れていた手が、不意に腹部を伝って下肢に触れたときには、本能的な震えを抑えることができなかった。

さすがに最後までするってことは、ないよね？

重い瞼をもち上げると、ぼやけた視界に彼の端整な顔がうつし出される。きれいな顔

だなあ、と見惚れていると、突然真梨乃の体の中心に甘い感覚が走った。油断していたため、不意をつかれて体が大きく震え、声が漏れる。

熱い。

痺れる感覚に翻弄されそうになりながらも、懸命に彼の手をつかむと快感に耐えた。

「お願い、待って」

感覚が研ぎ澄まされ、一時的に酔いが引いて意識がはっきりとしたところで口を開くが、体の自由が利かないのは相変わらずだった。

体が熱い、あふれる。

懸命に耐えていても、すぐに限界は来た。名前も知らない男の手に墮ちるなんてくやしすぎるのに、それさえもどこか心地いい。

最後の一瞬、真梨乃は声を抑えることを忘れていた。宙をさまよっていた手に、彼の手が重ねられる。握り返した直後、痺れる感覚が押し寄せて、真梨乃はあっさりと彼の指先が作り出す快感に屈してしまった。

ふわふわする。

浮遊しているような気分を味わっていると、一気にどこかに投げ出された。

体が深く沈む感じと、鼻腔をくすぐる洗いたてのシーツのいい香り。ベッドに運ばれ

たのだと気づきはしたが、まだ体には酔いが残っているようで、抵抗するために腕をふり上げることができなかった。思考ははつきりとしているのに、相変わらず^{また}瞼は重くて開けられない。

かろうじて薄目を開けて見上げると、ちょうど真梨乃を組み敷いていた彼と目が合った。

心臓のあたりが甘く疼く。

横幅のある黒目がちな目、細く通った鼻筋、薄く形のいい唇、どれも真梨乃の好みにぴったりで見惚れてしまう。

こんな美形が相手ならば、一度くらい抱かれてもいいかもしれない。しらふのときには絶対に考えられないような愚かなことを思いながら見上げていると、体の中心に熱いものが当たった。

本能的に声が漏れる。

そういえば前に付き合っていた恋人とは、しばらくご無沙汰だった。真梨乃自身、性に頓着するタイプではなかったので気づかなかったが、あれは恋人なりの別れのサインだったのかもしれない。

数ヶ月ぶりのことに体が強張り、力が入っていたためか少しだけ窮屈さを感じるが、すぐに快感で満たされた。

「んっ……」

真梨乃が痛みとは違う声を上げるとほぼ同時に、最奥まで貫かれていた。一度、また一度と律動がくり返されるにつれて、真梨乃の中の理性が崩れていく。

長い人生で、一度くらいはこんなことがあってもいいかもしれない。ちよつと軽率だったけど、仕方ないだろう。

自分に言い聞かせていると、ふたたび口づけられた。

甘く、柔らかい。

自分からも舌を絡ませて、手を伸ばして彼の頬に触れた。彼の手も、先ほどまでよりも熱い。

双方の体に熱が通いはじめてから達するまでは、あつという間だった。閉じた瞼の裏が、まぶしいほどに白く閃く。体の一番深いところで繋がったまま、ほぼ同時にふたりの熱が弾けて、真梨乃の意識はゆるやかに暗転した。

目を開けると窓から差し込む光と、真っ白なシートが視界に入った。

絵に描いたような、爽やかな朝だ。

「んー。いい匂い」

寝ぼけている真梨乃は言葉にならない声で呟くと、シートを握りしめて香りを堪能す

る。
 ベッドの感触も、自分のものとは違う。真梨乃のベッドは実家に住んでいた頃から使っていた十年もので、乱暴に飛び乗るだけできしむ。

こんなふわふわのベッドで毎日寝たいものだ。いい気分で横たわっていると、誰かが髪に触てくる感触があった。

「真梨乃さん、そろそろ起きてください」

馴染みのない、記憶に新しい声に、真梨乃は一気に目を開けて飛び起きる。

同じベッドの上に、すごい美形の男がいた。

一瞬体の動きがとまる。これはもしかしくなくても、朝起きたら見覚えのない男が隣に、というパターンだろうか。

いや、残念ながら真梨乃の記憶には昨夜の一部始終が残っていた。どれだけ飲んでも完全に記憶が飛んだ経験はなかったのだが、こんなときまできちんとすべてを覚えていなくてもいいのに、と思う。

あらわになつた胸元に、慌ててかけ布団を当てて隠す。

なにを言えはいいのだろうか。

どんな表情をするべきだろう。

必死に対処の仕方を考えようとすればするほどに、昨夜の出来事が鮮明によみがえり、

羞恥しゆうちに頭を抱えなくなる。

真梨乃の様子を見て彼は、まだ抵抗を試みているように思ったのだろうか。薄い唇の端を上げると、冷たく笑った。

「真梨乃さん、今さらだな。もうあきらめなよ」

「意味わからないから！ 見ないで！」

真梨乃はかけ布団を手にしたまま立ち上がると、近くにあった自分の服を手にとり浴室にかけ込む。手早く服を身につけて脱衣所を抜けると、玄関のところに彼がいて驚いた。

「ちょっと、びっくりさせないでよ」

言いながら視線を上げて、二度驚く。

彼は見上げるほどに背が高かったのだ。真梨乃が一六〇センチくらいだから、優に一八〇を超えているだろう。

不覚にも身長差にドキドキしてしまいが、平静を装うと真梨乃は、彼をにらみつけて口を開いた。

「昨日のことは、誰にも言わないでよ」

「はい？」

彼は真梨乃に生まれながらも動じる様子もなく、目を丸くした。ちょっとだけかわいい、なんて思ったことは絶対に顔に出したくない。

「わかった？ 黙っててよ！」
 言い捨てるのと、逃げるようにして部屋をあとにした。

なんだったのだろう。

自分の部屋に戻っても落ち着かない真梨乃は、大きく息をついた。

健二の部屋を訪れるつもりが、間違えて反対隣の部屋にいつてしまったようだ。そもそも真梨乃は、部屋を間違えたわけではなく、泥酔状態で廊下に出たら、彼に半ば無理矢理部屋へと連れ込まれたような気がする。

「あれ？ 無理矢理だったっけ？」

真梨乃が部屋へ連れて行くように頼んだような覚えもあるが、酔っていたためか詳細は曖昧だった。気にしても仕方がないだろう。都会の、独身者がほとんどのマンションでは、近所付き合いなどないに等しい。できるだけ鉢合わせないようにして、万が一会ってしまったって話しかけなければいい。

なんとかやり過ごせるはずだと、このときは信じていた。冷蔵庫を開けて冷えた水をとりに出し、喉に流し込む。

壁かけ時計を見ると、出勤時間よりも幾分か前だった。遅刻はせずに済みそうだ。複雑な感情を抱きつつ出勤準備を終えると、真梨乃は部屋を出た。

エレベーターや廊下、マンションの出入り口では、さすがに神経が張りつめる。朝の忙しい時間に会いたくないなどないし、面倒に巻き込まれることもごめん。警戒して忍者のような動きをしながら、マンションを抜けた。

なんとかあの彼とは遭遇せずに済んだ。徒歩数分のところにある会社にも無事たどり着いて、真梨乃は安心して仕事の準備にとりかかった。

「真梨乃、まだ終わってないの？」
 「もう少しだけかかりそう。先行ってて」

昼休みに入り、声をかけてきた早希子にかぶりをふると、真梨乃はパソコンに向き直った。会社に到着して安心したはいいが、今度は自己嫌悪に襲われて仕事が進まなかった。パソコンにうつし出されているものに、まったく集中できない。

「うわー」

自分でも意味のわからない声を漏らしながら、頭を抱えてうつむく。
 なんてことをしてしまったのだろう。いくら泥酔していたとはいえ、名前も知らない男の部屋にありがこみ、関係をもってしまうなんて。

「どうすればいいんだろう……」

嘆息して顔を上げると、オフィスには人がほとんどいなかった。

昼休みがずれることは、珍しいことではない。多少時間が遅くなっても、きちんと一時間はとれるし、空いている休憩室を使えることは、たまにならば得した気分になる。

ようやく仕事を片づけたのは十二時四十五分を経過した頃で、間もなく早希子が戻ってくる時間帯だった。ひとりきりの昼休みは寂しいが、ゆっくり休息をとるには悪くない。エレベーターに乗って二階へと降りる。足を踏み入れると二階は、人影がほとんどなく閑散としていた。

真梨乃の会社は、二階のフロアを丸ごと休憩所として開放していた。社員食堂や広々とした昼食スペースはもろんのこと、いくつか靴を脱いでくつろげる和室の休憩室もある。

寝不足のときなどには、一時間眠って過ごすこともあった。昼時は混雑していて滅多に使えない部屋だが、今はがら空きだ。襖を隔てた隣の部屋からはテレビの音が聞こえてくる。

真梨乃はテーブルに私物の入ったカバンをおくと、座布団に腰を下ろした。マンションで暮らすようになってからは縁のない和室だが、心が落ち着くのはなぜだろうか。今日はここでゆっくりとお昼ご飯を食べてから、メイクを直そう。

息をついて、自販機で買ったミネラルウォーターを一口、二口と飲み込んだ。冷たい

水が体の奥にまでしみ渡るような気がする。ペットボトルをおいたと同時に、真梨乃の後方すぐ近くで、人の歩み寄る気配があった。

人気がない休憩室の端にいた真梨乃は、なぜわざわざ近くに人が来たのかわずかに訝しんだ。けれども深く考えることなくベットボトルの蓋を閉じると、先ほど水と一緒に購入したパンに手を伸ばした、瞬間。

「探しましたよ、真梨乃さん」

斜め後ろから、低くよく通る声が響いた。頭が判断するよりも先に、体が震える。ふり返るのが怖い。

体が硬直して動けないしていると、視界に一見女の子のような繊細できれいな手がうつった。

そんな、まさか。この手には見覚えがあり、忘れようがない。

「いつもこんな適当な昼食では、体壊しますよ？」

彼は真梨乃のパンを一瞬だけ手にとり、すぐにテーブルにおいた。

とっさの行動に驚き、真梨乃は思わず振り返る。そこにはやはり、彼の姿があった。

ありえない。昨日真梨乃を無理矢理抱いた、隣人の男がなぜ会社の休憩室に現れるのだ。彼が昨日どんな格好をしていたのか覚えていないが、今日はスーツ姿だった。

「なんで……？」

ようやく口を開くと、真梨乃は床に腰を下ろしたまま後ずさりをする。本当は、なんでここに？ と問いたかったが言葉にならなかつた。彼はどこか、真梨乃の反応を楽しむように口を噤むと、薄く笑う。

あの表情だ。昨日真梨乃を部屋で組み敷いたときに見せた顔。

冷たいはずの笑いが妙に妖しくうつり、心臓が早鐘を打ちはじめた。

「真梨乃さんは、俺のこと知らないんですね。残念だな」

啞然とする真梨乃の髪を一筋指にとつて梳く。色気を感じる仕草に、真梨乃の心臓はさらに忙しく鳴った。

真梨乃が恋人からふられたときに会った、嫌味な冷笑男。それは昨晩、真梨乃を無理矢理抱いた男であり、そして、いま目の前にいる男だ。

昨夜は酔いすぎて即座に頭が答えを出してくれなかつたが、今ならばわかる。周りが気になり見渡すと、自分たちふたりに視界が届く範囲には、人がいなかった。テレビの音が断続的に聞こえてくるが、襖を一枚隔てた向こう側だ。

さすがにこの場で妙なことをしてくることはないだろうが、限定された空間にふたりきりでいることに本能的に震えを感じた。

ふたりの距離は数十センチ。

親しい友人や恋人ならまだしも、赤の他人と必要以上に近づくのは気持ちが悪く着か

ない。なんとか距離をとろうとするものの、簡単に詰められてしまう。

この端正な顔立ちには、見覚えがある。昨日そう感じたのは気のせいではなくて、彼が同じ会社の人間だからだったのだ。

それならば、会社から近い同じマンションに住んでいても、不思議ではない。

「あなた、なにをしたいの？」

「俺に興味をもつてくれるんですか？ 嬉しいですね」

「は？」

なにを言われたのかわからず真梨乃が啞然としてみると、目の前の彼は先ほどの冷笑を崩して無邪気な笑顔を見せた。

——わあ、かわいい。

不覚にもときめいてしまい、真梨乃は慌ててごまかす。

見た目だけならば、二十代前半にも見えるのだが、笑った顔は幼くて、もしかしたら十代と言っても通用するかもしれない。

「午後から仕事をする気がないんで、真梨乃さんが元気つけてください」

けれども相変わらず、言うことは意味がわからない。黙っていれば美形、というのは彼のような人を指すのだろうか。

「どうやって？」

呆れながらも仕方なく返事をする、唐突に顎をつかまれる。
え？　と思ったときには遅かった。

唇に柔らかな感触が当たったのと、シャンプーの爽やかな香りが鼻腔をくすぐったのは、ほぼ同時だった。

驚きのあまり身をよじるが、彼は離してくれない。

誰もいないとはいえ、会社の休憩室でこんなことをするわけにはいかなかった。いつ襖が開いて人が来るか、わからないのだ。逃げようとしても執拗に唇を重ねられて、ついには舌まで絡められる。

やっぱりのキス、気持ちいい……。

抵抗の気持ちが消えかけた瞬間、廊下の向こうから数人の足音が聞こえてきた。

唇が離れると彼は、短く嘆息してから耳元で囁いた。

「じゃあ真梨乃さん、またあとで」

そう言うなり、彼は真梨乃から離れて立ち上がった。ふわりとシャンプーと外国製の柔軟剤の匂いが混ざった、清潔感あふれる香りが立ちのぼる。

「あとで、つてどういうこと？」

真梨乃が見上げて詰め寄るも、彼は悪戯っぽく笑うだけで踵を返すと和室から立ち去ってしまった。

一体、なんだったのだろう？

真梨乃が呆然としてみると、襖を一枚隔てた廊下側から女子社員数人の甲高い声が聞こえてきた。

「あ、相馬くん！　こんなとこにいたんだ！」

「探したんだからね、陸。勝手にいなくなならないでよ」

彼女たちの雑談に混ざって、先ほどの彼の声が聞こえる。やがて彼らは休憩室を出たようで、話し声も聞こえなくなった。

ひとりとり残された真梨乃の心臓は、しばらくうるさく鳴っていたが、徐々に落ち着きをとり戻す。

相馬陸。

名前だけは知っていた。今年度の春頃に、噂好きの早希子から聞いていた。美形のエンジニア。リート社員が入った、と。

名門国立大学出身で、芸能人のように整った顔立ちの新人社員が、入社直後から先輩社員よりも優秀な成績を次々に出している、と。

大手商社なので高学歴は珍しいわけではないが、それに外見の良さと、入社直後から仕事で成果を出していることが加わると、広い社内でも噂になる。とくに、目立つ容姿のためか女子社員の間では、頻繁に名前が挙がっていた。

真梨乃はその時、恋人がいたし、噂に無頓着な性格だから詳しくは知らなかったが、早希子から話を聞いた当時は「ドラマみたいだねー」なんて笑っていた記憶がある。

真梨乃にとって、美形の新人社員、相馬陸という存在は、自分とは関係のない世界のものだと思っていた。

なぜキスをされたのかなんてわかるはずもない。

爽やかな香りと、甘い感触を残して去っていった陸は、なにを考えているのだろう。答えが見つかるはずもなく、真梨乃はテーブルにうつ伏せになった。

2

真梨乃は悄然^{しょうぜん}として、席を立った。

陸の噂というのは、思いのほか社内飛び交っていて、数日の間で色々な情報を自然に知ってしまったのだ。妙な形とはいえかかわりもち、意識しはじめたことであれれと耳に入るようになった。

当然女子社員からの人気は圧倒的というほどに高いが、今のところ特定の彼女がいるという噂はないようだ。

真梨乃は会社をあとにすると、マンションまでの道を歩く。自分も世間的には、大人の女性と呼ばれる年齢に達している。一度関係をもったからといって、年下の男性に責任を追及するつもりはない。一夜限りの過^{あや}ち、などという事態を自分が経験するとは思っていないかったが、人生なにか起きるかわからないということだ。あの日は真梨乃も泥酔^{どよ}していて、自分から陸の部屋に上がったようなものだから、責任は五分五分だろう。忘れよう。

今後陸とは深くかわからず、やり過ぎせばいい。悩んでいるヒマがあるなら、次の恋人を探したほうが有意義だ。早希子にでもそれとなく頼めば、翌週には合コンの手配を整えてくれるだろう。

マンションについて鍵をとり出そうとすると、人影が現れた。

「真梨乃さん、お帰りなさい」

陸だ。

なぜここで、無駄に爽やかな笑顔の陸に鉢合わせるのだろうか、と考えて自分たちが同じマンションの隣同士であったことを改めて思い出した。

「なに？」

真梨乃の声が、上^あずった。これでは陸を意識していることが丸わかりだ。自意識の強そうな若者には「真梨乃が好意をもっている」とうつつてしまう可能性もある。

「待つてたんですよ、あなたを」

臆面もなく口にする。

彼の言葉に心臓が、わずかに甘く疼いた。不覚にも頬が熱をもちそうだが。

「私は別に、キミに待つていてももうような覚えはないんだけど」

気持ち悟られないように目をそらした真梨乃がオートロックを開けると、当然のように陸もあとをついてきた。

「冷たいですね」

エレベーターの前にまでついてこられて、真梨乃は戸惑う。エレベーターの到着を待つている間に生まれた沈黙に耐えられず、口を開いた。

「あのね、冷たい以前に私がキミに優しくする理由はないんだけど？」

精一杯突き放した口調で話しているつもりなのに、陸は表情も変えない。

「今から俺の部屋に、来ませんか」

「はあ？」

ある程度予想はしていたが、こうもストレートに誘われるとは思っていなかった。

哑然として見上げると、目の前の美しい男は無表情だったが、口元だけに微笑を浮かべる。

「いいですよね？ このあと予定ありますか？」

予定はない。

先日恋人にふられたばかりなので、あるはずもない。

陸にはあの日、ふられたことや恋人との付き合いのエピソードを事細かに話してしまっている。ふられたときに笑われたことを思い出して、無性に苛立った。

「私の予定なんてキミに関係ないでしょ。大体なんで部屋まで行かないといけないの？ 話があるならそこで聞くよ」

真梨乃がエントランスホール付近に隣接するロビーに視線を向けると、陸は口元の笑いを消した。無言の口元は、徐々に拗ねたようにきつく結ばれる。

少々キツイ言いかたをしてみましたか？

真梨乃には年下の男性と付き合った経験がないので、どの程度の加減で話したらいいのかわからない。弟の創や健二は昔からの付き合いだし、異性というカテゴリーには入っていない。改めて、創や健二のような年の男の子と寝てしまったことに、恥ずかしさが込み上げる。

「別に話なんて、ないですよ」

「そう、じゃあ私はもう帰るね」

「真梨乃さんと一緒にいたいから、じゃ理由になりませんか？」

「意味わからない」

エレベーターが到着して乗り込むと、当然のように陸も一緒に乗り込んで来た。先ほどかかわらないと決めたばかりだったのに、気づけば陸のペースに乗せられて相手をしてしまっている。けれども話しかけてこられては、無視することもできない。

真梨乃はある日のことを怒っているわけでも、陸のことが嫌いというわけでもない。ただ、かかわれば面倒なことになりそうなので、避けたかっただけだ。

すぐにエレベーターは真梨乃のフロアに到着する。当然、同じフロアの彼も降りた。真梨乃が口を開かずにいると、陸も無言で歩いていった。

静寂の中、ふたりの足音だけが廊下に響く。

ようやく部屋の前にたどり着いて鍵をとり出すと、陸は真梨乃の真後ろに立っていた。隣室の扉を開けようとしている気配はない。

「ちよっと、なんなの！」

このまま扉を開けたら、勝手に入ってきたような気がして、真梨乃は彼を見上げて叫んだ。てっきり先ほど見せた冷たい表情をしているのかと思えば、陸は不貞腐れたような拗ねた顔をしていた。

「真梨乃さんが、俺の部屋に来るのが嫌だって言ったんじゃないですか」

「そうだけど、なんで私の部屋に来ようとしてるの！」

「ダメなんですか？」

噛み合わない会話に、真梨乃は軽い目眩を感じる。この子には、言葉ではっきりと拒絶するしかないようだ。

唇を強く結ぶと、意を決して口を開いた。

「ダメに決まってるでしょ！ ああね、私はもうキミとはかわりたくないの。嫌がってるのがわからないの？」

顔がよすぎるがゆえに拒絶された経験などなく、女性からの冷たい言葉は照れ隠しとも受けとっていたのだろうか。とんでもない話だ。

ふたたび彼の顔が、無表情に覆われた。またしても不貞腐れたのだろうか。なまじ顔が整っているから無表情になると迫力があり、いちいち身構えてしまう。

「わかったら部屋に戻って。それに私の部屋に来るなんて無理だよ、ひとり暮らしじゃないから」

「知ってますよ。弟と住んでるんでしょ？」

予想外の言葉が返ってきて呆然としてしまうが、隣人ならば家族構成くらいは知っていても不思議ではないのかもしれない。

そう自分に言い聞かせている真梨乃を、陸は次なる言葉で驚かせた。

「でも今は帰ってきていない。ですよね？」

笑ってしまいうさだ。いくら隣人だからといって、把握しすぎではないだろうか。

真梨乃が先日まで、健二の反対側の隣に誰が住んでいるのかさえ知らなかった。なぜ陸が、創の行動やスケジュールまで熟知しているのだろう。自分が無頓着すぎるのだろうか。しかしそのことに対して、恐怖よりも呆れや笑いが先に来てしまうから不思議だった。

「そんなことどうでもいいでしょ。さっき私が言ったこと聞いてなかったの？ もう馴れ馴れしく話しかけないで」

それまでは、どこか少年っぽさの残っていた顔が、突然暗く翳った。背筋を、冷たいものが這い上がる。

「ふーん。そんなこと言っただいいんですか」

「どういう意味？」

真梨乃が食ってかかると陸は甘く微笑んだ。棘があるのに、色気もある。

「あの日のこと、」

きれいな唇が言葉を紡ぐ様子から、真梨乃は目をそらせなかった。

「黙ってほしいんですよ？」

真梨乃の頬が熱をもつ。

見上げてにらみつけると、陸は悪びれる様子もなく笑っていた。妖しい微笑に、目眩がする。

「ほら、一度話しませんか？ 俺の部屋でゆっくり」

「最低……」

かわいらしい顔して、とんでもない男だ。

真梨乃が奥歯を噛みしめっていると、腕をつかまれた。

「離して！」

「まだそんなこと言うんですか？ 俺は別に、誰に知られてもいいですけどね」
手首をひねって抵抗しようとするが、力で敵うはずもなかった。

頬が熱い。心臓が、うるさいほどに音を立てていた。

この状況は、間違いなく脅されている。ずるずると流されてしまうかもしれないことへのおそれはあるが、それ以外の恐怖心はさほどなかった。

これ以上強引に出られたら、逆らえない。部屋に入ってしまった以上、いつでも体を許すのかは、わかりきっている。一度あんな関係になってしまった以上、いつでも体を許すと思われているのだろう。こんな軽い男の子の玩具になって、なりたくなかった。

「離してよ。警察呼ぶよ」

実際には呼べるはずもない。真梨乃の虚勢だとわかっているのか、陸は冷たく笑うだけ。手で手をゆるめようとはしなかった。

「真梨乃？」

不意に、すぐ近くで名前を呼ばれた。声のした方を振り返ると、今帰宅したばかりだと思われる、創がいた。

「ヤバイ、創には陸との関係を知られたくない。どうしたらごまかせるだろうか、と考えた真梨乃の口は咄嗟とつぎに動いていた。

「助けて！」

大して恐怖など抱いていなかったのに、口をついて出た悲鳴にも似た声に、自分で驚く。真梨乃がつかまれていない方の手を伸ばして、創に助けを求めると、創は突然陸に突進してつかみかかった。

「おい、てめえなにしてくやる！」

自然と陸の手は離れて、真梨乃は創の背にかばわれた。

「創、もういいから！」

創は陸に殴りかからんばかりの形相ぎょうそうだったので、慌ててとめると真梨乃は部屋の鍵を開ける。

「早く部屋に戻ろう」

創の手を引いて、真梨乃は部屋に逃げ込んだ。

「なんなんだよ、あいつ」

当然、創の機嫌は最悪だった。

「ごめんね」

「いや、いいけどさ」

この様子を見ている限りでは、創は陸が隣人だということを知らないようだ。知られたら色々と厄介なので、真梨乃から話す必要はない。

「ちよっとつきまとわれて、困ってたの」

「知ってるやつか？」

創に嘘をつくのは心苦しかったが、知っていると思えばならん関係か話す必要が出てくる。酔っ払って関係をもったなんて言いたくないので、真梨乃はかぶりをふった。

「でも家を知られてとなると厄介だな」

「そうだね。なにかいい方法ないかな」

創に頷うなづきながらも、真梨乃は大して深くは考えていなかった。

理由のひとつに、陸へ恐怖を抱いていないことが挙げられる。彼の思惑はわからないが、悪意をもっているようには感じられないためだろうか。

「どうごまかすべきかと考えていると、創が息をついた。

「俺が毎日会社まで、送り迎えしてやるうか？」

「えっ？」